口承の記憶と継承

まえがき

花部 英雄

口承文芸を育み継承してきた日本の民俗文化が、急速に変質し始めた。昭和と平成の時代を比較した場合、口承文芸の環境が大きく変わってしまったことは誰の目にも明らかであろう。伝承的な昔話は徐々に後退し居場所が無くなりつつある。こうした局面に臨んで、新たな研究への模索を始めなければならない。

今回のシンポジウムのテーマである「口承の記憶と継承」も、そうした問題意識にもとづいている。昔話の記憶の問題は、これまで語り手の立場から、水沢謙一（『新潟県の昔話の語り手』）や野村純一（『日本の語り手』）などによって追究されてきた。語り手自身がどのように昔話を記憶し、またそれをどのように表現しているのかといった問題を、おもに語り手からの聞き書きに基づく情報をもとに構想されてきた。しかし、そうした方法が、語り手の不在という状況では不可能になった。これまでの研究成果を踏まえながらも、新たな記憶と表現の研究を構築していくかなければならない段階に入ったといえる。

口承文芸の基本は「口から耳へ」という音声言語の活動である

が、川田順造は本誌の三十二号の「伝承と集合的記憶―予備的覚え書き―」で、伝承は口承に加えて書承、体承（身体的記憶）、物承（物体、土地、風景）などとも密接に関連しており、また、これらの伝承媒体は社会的に形成される「集合的記憶」とも結びついているという。さらには、個体がもつ諸感覚（体内感覚、嗅覚、味覚、触覚、聴覚、視覚）とも影響し合っていると指摘し、伝承の包括的な考察のための理論的枠組を提示してくれた。語り手の体験による記憶の情報が経験的なものであるとしたら、川田の提案は記憶の社会的、人類学的なアプローチを示唆したものといえる。問題はこれにとどまらず、記憶のもつ生理的、心理的な面からの追究も含めた研究へと進めていく必要がある。

ところで、口承の記憶はその表現と密接不離の関係にある。「記憶は覚える条件と思いつく条件との関係によって決まる」という心理学の原則からすると、記憶の問題は表現の仕方に現れるものであり、表現されたものを仔細に分析することで、その仕組みが明らかになってくるはずである。そこで、口承の表現を継承の問題との組み合わせにおいてとらえる必要が生じてくる。その場合、継承を単なる物理的な場の問題としてだけでなく、コミュニケーションの一環としての視点から深め解明していくことが求められる。

以上の課題を、どのように個別に追究していくかについて、報告者の立場を確認しておく。花部英雄は災害にまつわる伝説などを取り上げ、被災地がその被害を今にどのように伝えてい

るかに注目する。被害事実が、被害記憶としてどのように形象され、また地域環境で継承されているかを、具体的な事例をもとに報告する。ただ、災害伝承を従来の口承文芸の枠組みでとらえることの限界を指摘しつつ、集合的記憶の概念を用いた分析から新たな被害記憶の解釈を提示する。

矢部敦子は、生家でもにも祖母から日常会話の延長線上にいろいろの話を聞いて育った。家族のコミュニケーションの一部であるそれらの話を『矢部敦子の語り』（日本民話の会）などにまとめている。伝承的な語り手が消えてしまいつつある現在、最後の貴重な語り手である矢部が、自分が保存している祖母の昔話を、語り手の立場から対象化し、さらに継承の問題へと進めていく。

認知心理学者である廣瀬清人は、昔話の記憶を対象とした『集団パラダイムにおける意味世界と心理機能』（三弥井書店）を刊行している。記憶の権威とされるバートレットの理論は、昔話においては通用しないことを、その著書で明らかにしている。そこで昔話の記憶を「場パラダイム」における社会化過程の問題としてとらえ、また、よく生きるための豊潤な意味世界である昔話を心理学の立場から解釈する。

本シンポジウムは以上の伝説研究や語り手、心理学の立場からの報告をもとに、口承の記憶と継承の問題を議論していくことになる。ともすれば、個人的営為と思われがちな口承文芸を、聞き手や社会集団におけるコミュニケーションの問題として深めていければと考えている。

（はなべ・ひでお／國學院大學）

シンポジウム／第三九回大会「口承の記憶と継承」

被害記憶の形象と継承

花部 英雄

はじめに

大きな自然災害の被害体験は、事故の直後には生々しく語られるが、それが世代間を越えて継承されているとは必ずしも言えないようである。今度の東日本大震災による大津波に遭遇した際にも、これまでの被害体験を知識として十分に継承していたかと思うとそうではない。「二代に一度は大きな津波に襲われる」と言われる津波常襲地帯の三陸地方においても、それだからといって、前代の経験知が生かされたとは聞かない。被害の甚大さに比して備えの不十分さはどうしたものだろうか。

防災の立場から災害の記憶を継承しようと人為的な「災害かたりつぎ研究塾」の活動に取り組む佐藤翔輔は、災害の継承は難しいという認識に立って「世代を越えて受け継がれる効果的な伝承方法のあり方について議論を深めていく」^①必要があると述べる。賛成であるが、なぜに災害記憶の継承が難しいのか、